

『鳳城聯句集』訓注稿(九)

楊
昆
鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに書き下しを施し注釈を付けたものである。前稿(本誌第四三号、令和二年四月)の続きとして、全三十作のうち、最後の二点となる第二十九と第三十をここに掲載する。

【凡例】

- ・ 五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、書き下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、書き下しに適宜濁点を施した。
- ・ 明らかな誤字もそのまま翻刻し、語注において説明を加える。
- ・ 注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。

塩第十四 慶長十八年六月二十一日

1 宜_レ聴_ニ水_一声_ノ竹 聴_ニく_ニ宜_ニし 水声の竹

2 滴_レ涼_ヲ好_シ洗_ニ炎_ヲ 涼_①を滴りて好し 炎を洗ふに 溪

3 難_レ除_キ嶺_一頂_ノ樹 除き難し 嶺_②頂の樹

4 期_メ月_ヲ幾_ヒ窺_レ檐_ヲ 月を期して幾たびか檐を窺ふ 岳

5 仙_一眷_{友_トスル}逋_鶴 仙眷 逋を友とする鶴 賡

6 信_一音_{使_ヒスル}陸_一 信音 陸_③に使ひする鶴 寿洪

7 睡_一郷_ハ雖_セ喜_一見_ト 睡郷は喜見と雖も 潤

8 治_一世_必清_廉 治世 必ず清廉 竹

9 踏_ハ実_ヲ聖_一賢_ノ履 実を踏む 聖賢の履 節

10 寓_ス形_ヲ妍_一醜_ノ匳 形を寓す 妍醜の匳 御

(1) 涼しげな音がすること。類例として貫休「金繩殘果落、

竹閣涼雨滴（遇叶進士）など。

- (2) 山の頂上。方干「湖辺風力掃帆上、嶺頂雲根在雪中」（登竜瑞観北巖）など。そこに道観や仏寺が多く建てられ、漢詩では同じ意味で峰頂という語で詠むことが多い。李白「欲尋廬峰頂、先繞漢水行」（留別金陵諸公）など。4句と併せると、頂上の木々が茂るあまり、月を眺める妨げになることをいう。

- (3) 陸機。飼犬が手紙を携えて故郷まで一往復した故事（述異記）。前句5の林逋が鶴を飼ひ馴らすことと対偶。

- (4) 好むこと。『三体詩』に周賀「鳥鳴春日晩、喜見竹門開」（春喜友人至山舎）とある。

- (5) 形を託すこと。陶淵明「已矣乎、寓形宇内復幾時、曷不委心任去留」（歸去來兮辭）。「妍醜」は美醜、「匱」は鏡匣。章孝標「人人入蜀謁文翁、妍醜終須露鏡中」（上西川王尚書）他。

11 馮顥^⑥ 天^⑦下^⑧白^⑨ 馮顥^⑥は天下^⑦白^⑧ 良^⑨

12 罕^⑩ 嘗^⑪邑^⑫中^⑬黔^⑭ 罕^⑩が嘗^⑪れは邑^⑫中^⑬の黔^⑭ 雲

13 書^⑮圃^⑯傭^⑰耕^⑱外^⑲ 書圃^⑮ 傭耕^⑱の外^⑲ 緒

14 禪^⑳風^㉑衆^㉒望^㉓僉^㉔ 禪風^㉑ 衆望^㉓僉^㉔ 召

15 報^㉕霜^㉖鐘^㉗進^㉘歩^㉙ 霜^㉖を報^㉕じて鐘^㉗は歩^㉘を進^㉙む 岳

16 垂^㉚露^㉛筆^㉜揮^㉝髯^㉞ 垂露^㉚ 筆^㉜は髯^㉞を揮^㉝ふ 溪

17 雁^㉟字^㊱陶^㊲陰^㊳錯^㊴ 雁字^㉟ 陶陰錯^㊴ 洪

18 龜^㊵焦^㊶蒙^㊷霽^㊸占^㊹ 龜焦^㊵ 蒙霽占^㊹ 賡

19 封^㊺侯^㊻伝^㊼印^㊽墨^㊾ 侯^㊻に封^㊺ず 印^㊽を伝^㊼ふる墨^㊾ 竹

20 改^㊿観^㊿綴^㊿珠^㊿簾^㊿ 観^㊿を改^㊿む 珠^㊿を綴^㊿る簾^㊿ 澗

- (6) 蘇軾「馮顥久已敲殘雪、戎眼何曾眩落暉」（次韻張昌言給事省宿）に見え、馮唐を指す。「天下白」は万里集九による蘇軾詩の注釈の書名。

- (7) 子罕。色が黒いことから黔という。『春秋左氏伝・襄公十七年』「築者謳曰、沢門之皙、実興我役、邑中之黔、実慰我心」とある。蘇軾「邑中之黔相指似、白髯紅帶老不羸」（慶源宣義王丈、以累舉得官、為洪雅主簿、雅州戸掾。遇吏民如家人、人安樂之。既謝事、居眉之青神瑞草橋、放懷自得。有書來求紅帶、既以遺之、且作）。

- (8) 書林、書物の多いところ。司馬相如「修容乎札園、翱翔乎書圃」（文選「上林賦」）。「傭耕」は雇われて農業を行う者。『史記・陳涉世家』「陳涉少時、嘗與人傭耕」。

- (9) 露を垂らすこと、仏法の普く施されることなど。ここでは書の一体。『初學記』巻二十一の「文字第三」に事対として、「垂露 偃波」が立てられる。その説明として、「垂露書如懸針而勢不遒勁、阿那若濃露之垂、故謂之垂露」と

ある。

(10) 「陶」と「陰」とが誤写されやすいことをいう。魯魚の類い。

(11) 亀の甲を用いて占う際に焦げること。『春秋左氏伝・定公九年』「卜過之、亀焦。衛侯曰、可也。」「蒙」は暗いさま、また『易経』六十四卦の一つでもある。

(12) 「印」は仰ぐ、高ぶること。ここでは前後と意味を成さないため、「印」の誤写と思われる。侯爵の印を伝える。「墨」は即墨、斉の国名。斉王が即墨大夫の功績を称え、万家を封じた(史記・田敬仲完世家)。

(13) 底本「観」の振り仮名に「ノ」と記してある。「改観」という熟語があるため、「観」は様子、風景の意味で「かん」を読むべきであろう。「ノ」と記されるのは、「クニノナ」の意味もあるということか。前句19の典拠となる『史記・田敬仲完世家』において、即墨大夫が褒賞されたのに対して、阿の大夫が政務を怠ったことで刑に処されたという件がある。そして「遂起兵、西擊趙衛、敗魏於濁沢、而困恵王。恵王請献観以和解、趙人帰我長城」と続く。『鳳城聯句集』では振り仮名は必ずしも詠み方を示すだけでなく、前後の連想のヒントを提示することもある。

21 菊^{ツキ}綻^{ハナ}金星百 菊綻びて金星は百 御

22 葵^{アオイ}繁^{ハルカ}紅塔尖^{ナギ} 葵繁して紅塔は尖なり 節

23 数^{カズ}来^キ推^ス輦^ワ蝶 数へ来る 輦を推す蝶 雲

24 独^{ヒトリ}拙^{シラ}上^ノ竿^{ハシ} 独り拙し 竿に上る 良

25 鐘^{カネ}美^ミ媒^マ詩^シ景^{ケイ} 美を鐘む 詩に媒する 景 召

26 旌^{ハス}名^ナ老^ヲ学^{ガク}閨^ニ 名を旌はす 学に老いたる 閨 岳

27 文^{モン}軍^{クン}儒^{ニョ}扨^{トル}固^コ 文軍 儒は固めに扨る 溪

28 佳^カ客^{カク}孰^{ナニ}知^チ鑿^{タク} 佳客 孰れか鑿くことを知る 御

29 便^{リン}静^{セイ}僧^{ソウ}窓^{スウ}谷^コ 静かに便りす 僧窓の谷 賡

30 惹^ツ虚^コ帝^{テイ}座^ザ敵^{テキ} 虚を惹く 帝座の敵 洪

(14) 「葵」は蜀葵、濃淡さまざまな赤や黄の花を咲かせる。宋の王之道「葵花紅障錦、萱草青垂帶」(千秋歲、其四)、

蘇轍「綠竹瑯玕色、紅葵旌節花」(開窓)。

(15) 蘇軾「帰来羞汚見妻子、自比鮎魚綠竹竿」(梅聖俞詩集中有毛長官者今於潜令国華也聖俞没十五年而君猶為令捕蝗至其邑作詩戲之) など、出世できようがないことをいう。

(16) 「閨」は人名か、後考を待つ。

(17) 嚴光。「虚」は虚名、「少有高名、與光武同遊学」(後漢書・逸民列伝) するも、光武帝が即位すると隠遁してしまふ。「帝」は光武帝。

31 戲^シ蜂^{ハチ}狂^{キヤウ}故^コ態^{タイ} 戲蜂は狂の故態 澗

32 靈鷲^{リョウリョウ}、彼^カ言^{コト}言^{コト} 靈鷲は彼の言譚

33 山^{ヤマ}破^ハ顔^{ゲン}残^ノ雪^{セツ} 山は残雪に破顔す

34 閨^{クニ}回^ヘ腸^ス小^コ籤^{セン} 閨は小籤に回腸す

35 枕^{マク}從^ニ梧^ブ尽^ス泰^{タイ} 枕は梧の尽きてより泰

36 舟^{フネ}為^ス藕^ニ開^キ漣^{レン} 舟は藕の開きたるが為に漣

37 親^{オヤ}親^{オヤ}双^{フタ}双^{フタ}鶺^ズ 親を親とす 双双の鶺

38 元^{トス}元^{トス}九^ク九^ク鶺^ズ 元を元とす 九九の鶺

39 無^{ヘミ}方^ハ愚^ウ陋^{ロウ}累^ヒ 方無きは愚陋の累ひ

40 雖^{モト}野^カ渥^カ恩^{オン}霑^{テン} 野なりと雖も渥恩霑ふ

(18) 「狂」はここでは蜂の姿をいうが、前句30の蔽光の言動から連想された語。皮日休「狂奴臥此多、所以踏帝腹」(添魚貝詩、其二、釣磯)。

(19) 「泰」は泰山または泰華か。桐の葉がすべて落ちたので、その音に驚かされることなく、ようやく枕を泰山のように高くして寝ることが出来るという意。桐の葉の音で眠れない詩は、例えば宋の曾豊「蟋蟀挑孤詠、梧桐攪独眠」(秋途暮息)など。

(20) 「漣」は瀧溪、前句との対偶で地名(水名)、また周敦頤の号である。周敦頤の「愛蓮説」(古文真宝)はよく知られる。

(21) 鶺鴒、脊令、兄弟の喩え。『論語・小雅』「脊令在原、兄弟急難」。「親」は兄弟を含む肉親、「親」ではない。

(22) 龜の甲のへり。「元元」は名詞としては庶民の意、「九九」は重陽の節句など幾通りの意味があるが、ここの含意は不明。

41 秋^{アキ}易^ヘ萌^シ愁^ス草^{クサ} 秋萌し易きは愁草

42 居^ル求^ム安^ニ覆^フ苦^ク 居安んずることを求むるは覆苦

43 施^セ工^{コウ}彫^ル久^ク朽^ク 工を施して久朽を彫る

44 喚^{ケン}背^セ任^ニ横^{コウ}拈^ニ 背と喚んで横拈に任す

45 瘴^{シヤウ}面^{メン}衡^{コウ}梅^{バイ}杲^{コウ} 面を瘴にす 衡梅の杲

46 隱^{イン}身^{シン}柴^シ栗^リ潜^{セン} 身を隠す 柴栗の潜

47 鶯^ウ孤^コ琴^{シン}道^{ドウ}士^シ 鶯は孤琴の道士

48 鶯^ウ隻^{シツ}籠^{リョウ}温^{オン}燐^{リン} 鶯は隻籠の温燐

49 蘭^{ラン}婢^ヒ視^シ凡^{ソウ}種^{シュ} 蘭は凡種を婢視す

50 蒿^{ハハ}、提^{ツキ}起^ス祖^ソ、鉗^{クワン} 良

(23) 横^{ヨコ}にすること。偈頌や禪僧の詩に多用される。『碧巖録』

「蓋^{カサ}為^レ他平生無^レ許多計較^{ケツカウ}、所以横拈倒用^{ヨコニテヒラキサカサ}、逆行順行^{ギャクギョウジュンギョウ}、得大自在^{トクダイジザイ}」(卷一、第二則「趙州至道無難」)。

(24) 大慧宗杲、『正法眼藏』の著者。宋紹興十一年に衣牒を毀され衡州に逃れ、三十六年に梅陽に移った(大明高僧伝・卷五)。句中「衡」と「梅」はこの二つの地名をいう。

(25) 陶潛。白居易詩「訪陶公旧宅」の序に「余夙慕陶淵明為人(中略)今遊廬山、經柴桑、過栗里、思其人」とあり、句中「柴」と「栗」はその隠居した場所を指す。

(26) 「燂」は食べ物を火で加熱して熟させること。「燂温」の熟語用例があり、經書を温習することをいう。ここは押韻するために順番を調整した。鷺鳥に用いられる意味は不明。

(27) 「鉗」は鉗鎚、厳しい教誨の喩え。禪僧の詩に多い。

51 乾^{セン}陪^{ハイ}猿^{エン}入^ニ室^{シツ} 乾陪 猿入室 溪

52 暮^モ詠^{エイ} 兎^ウ登^{トウ}櫓^ロ 暮詠 兎は櫓に登る 洪

53 類^{ルイ}長^{チヤウ}譬^{ヘイ} 鄒^{ソウ}軾^{シツ} 譬に長ずる鄒に類するは軾 良

54 夢^{メル}探^{タン}懷^{ワイ} 郭^{クワク}淹^{イン} 懷を探る郭を夢みるは淹 御

55 斷^{タン}魂^{コン}唯^{ワイ}別^{ベツ}賦^フ 魂を断つは唯別賦 澗

56 誦^{スル}口^コ是^ニ陵^{リョウ}函^{フン} 口に誦ずるは是れ陵函 節

57 柳^{リウ}向^ヘ風^{フウ}師^シ 柳は風師に向かひて拝す 雲

58 荔^ヘ燃^テ阿^ア母^メ甜^ニ 荔は阿母に燃へて甜し 召

59 鵲^{セツ}啼^テ欄^{ラン}有^ニ蜀^{シツ} 鵲啼きて欄に蜀有り 節

60 狐^コ去^テ壁^{ヘキ}無^ニ灑^セ 狐去りて壁に灑無し 竹

(28) 『石門文字禪』「自笑乾陪奉漢、人誇熱肺腸僧」とあり、「乾陪奉」の略か。

(29) 齊人の鄒陽、漢梁王の客。ここは前句にある「兎」を承けて、梁王が兔園で賓客と雪を眺め遊覧した故事を踏まえる。『文選』に所収する謝惠連の「雪賦」に「梁王不悦、遊於兔園。適置旨酒、命賓友。召鄒生、延枚叟」と、鄒陽が登場する。また司馬相如の賦に感動した鄒陽は、相如に続き賦を詠んだと記されている。ここは鄒陽を詩賦に長ける人物として蘇軾と比べた。

(30) 晋の郭璞。梁の江淹が夢で郭璞から五彩の筆を贈られ、後にまた返すよう求められた故事。『太平廣記』に見える。覃第十三90句に既出。

(31) 江淹の「別賦」、『文選』に所収される名篇。

(32) 「陵函」は不明。琅函という語があり、道教の書を指す。また陵は杜甫、陵函は杜甫の手紙か。

(33) 風神。張九齡「日御馳中道、風師卷太清」(奉和聖制登

太行山率爾言志」など。ここは風で揺れる柳を拝むと喩える。

(34) 「瀾」は山の名。狐との関わりは不明、後考を待つ。

61 吟^ハ弄^ス青^ニ灯^ノ味^ヲ 吟は青灯の味を弄ず

62 勤^テ繙^{ハトク}黄^ノ卷^ヲ籤^ニ 勤めて黄卷の籤を繙く

63 廢^レ籬^ヲ翻^ス玉^ヲ露^ヲ 廢籬 玉を翻す露

64 端^レ木^ヲ扱^ツ材^ヲ塩^ニ 端木 材を扱ぶ塩⁽³⁶⁾

65 炉^ニ話^シ煖^ニ寒^ノ会^ヲ 炉話 煖寒の会

66 線^ハ思^フ至^ニ日^ヲ添^ニ 線⁽³⁷⁾は至日の添を思ふ

67 昌^ニ棠^ヲ彭^ノ莫^ヲ恨^ム 昌棠⁽³⁸⁾ 彭は恨むること莫し

68 建^ニ茗^ヲ汲^リ何^ノ嫌^ヲ 建茗⁽³⁹⁾ 汲は何ぞ嫌はん

69 濯^ニ濯^ヲ飛^ニ泉^ノ石^ヲ 濯濯 飛泉石

70 峨^ニ峨^ヲ化^ニ境^ノ巖^ヲ 峨峨 化境の巖

(35) 書物。前句の「青灯」とよく取り合わされる。陸游「青

顔白髮入衰境、黄卷青灯空苦心」(客愁)。

(36) 塩梅。必須の調味料で、国家を支える人材の喩え。唐の

呂巖「濟世応須不世才、調羹重見用塩梅」(書与胡詠之)。

「端木」は端木賜、字は子貢、孔門十哲の一人。

(37) 『荆楚歲時記』に「晋魏間、宮中以紅線量日影、冬至後、

日影添長一線」とある。杜甫「天時人事日相催、冬至陽生

春又来。刺繡五文添弱線、吹葭六琯動浮灰」(小至)。「至

日」は冬至。

(38) 昌州の海棠が著名。宋の汪元量「我到昌州看海棠、恰逢

時節近重陽」(昌州海棠有香、其一)。「彭」は彭沢、ここ

は陶淵明が九月九日に満開の菊に向かつて呑む酒がないこ

とを恨んだという、「無銭対菊」の故事を踏まえる。昌州

では海棠が満開、菊ではないから陶淵明よ恨むこと莫かれ。

(39) 建茶。建茶ほど漢詩の用例が多くない。前句と対偶を作

るなら、「汲」は地名のはずであるが、ここは茶を煮るた

めに泉水などを汲むことか。

71 樵^ノ風^ヲ揚^ツ浩^ノ唱^ヲ 樵風⁽⁴⁰⁾ 浩唱を揚ぐ 御

72 天^ノ道^ヲ益^ス貞^ノ謙^ヲ 天道⁽⁴¹⁾ 貞謙を益す 澗

73 栽^レ德^ヲ避^ク駝^ノ術^ヲ 徳を栽えて駝が術を避く 洪

74 斬^レ頑^ヲ乏^ニ鑢^ノ銛^ヲ 頑を斬りて鑢の銛きに乏し 雲

75 杖^ヲ吟^ム龍^ノ八^ノ尺^ヲ 杖なり 龍は八尺 良

76 粟散^{（44）}貝東漸 粟散^{（44）} 貝は東漸 廣

77 横^ニ發^ス閱^ス伝^ヲ本^一 横に發す 伝を閱す本^{（45）} 御

78 潜^{カニ}書^メ著^ノ偈^ヲ還^一 潜かに書して偈を著す還^{（46）} 岳

79 俊機^{シトス}遲^ニ掣^ヲ電^ヲ 俊機 掣電を遲しとす 節

80 疎^ニ箔^ニ漏^ニ円^一蟾^ヲ 疎箔 円蟾を漏らす 潤

（40）地名か、不詳。「浩唱」は高らかに歌うこと。陸龜蒙「^{（40）}携天壤徒、浩唱義皇言」（奉和襲美太湖詩二十首）。

（41）底本は「蔑」とあり、「蔑」は「天」と同じである（漢語大辞典）。

（42）郭橐駝、植樹を善くする。柳宗元「種樹郭橐駝伝」（古文真宝）を典拠とする。ここは徳を種えるには郭橐駝の方法が参考にならない意。歌第五68に既出。

（43）名劍鎮鄧。釈法泰「横按鎮鄧全正令、太平寰宇斬痴頑」（頌古四十四首、其二十七）（禪林句集）。

（44）数の多い比喻。また国の名（仏学大辞典）。「貝」は写經に用いられる栴葉、転じて仏典をいう。

（45）「本」は曹山本寂禪師か。「閱」は字義不詳。「閱」の誤写か。

（46）「還」は杜伯昇か。杜伯昇は字が還、藏書家。蘇軾に「成都進士杜還伯昇出家名法通往來吳中」という詩がある。

81 雅興^ニ逢^レ花^ニ遣^ル 雅興 花に逢ひて遣る 溪

82 釣^一歌^ハ隔^カ葦^ヲ織^シ 釣歌 葦を隔てて織し 雲

83 遊^一魚^ハ喁^ス浪^ノ穩^{ナルニ} 遊魚 浪の穩やかなるに喁ず^{（47）} 御

84 祭^一蠟^ハ覺^フ年^ノ殲^{フルヲ} 祭蠟 年の殲くるを覺ゆ^{（48）} 雲

85 魯薄^一純綿^ノ蜜 魯薄 純綿の蜜 洪

86 廬淹^一虚織^ノ縑 廬淹 虚織の縑 節

87 臨^レ谿^ニ橋^一戰^一戰 谿に臨みて橋は戦戦 岳

88 徹^レ曉^ニ夜^一厭^一厭 曉に徹して夜は厭厭^{（49）} 良

89 專^一対^一砌^一辺^一蛭^一 專対^{（50）} 砌辺の蛭 竹

90 苳^テ盟^ヲ旧^一識^ノ鵲^一 苳みて盟ふ旧識の鵲 良

（47）魚が口を上に向けること。『韓詩外伝』に「水濁則魚喁、令苛則民乱」（卷一）とあり、また蘇軾「寒魚亦不睡、竟夕相喁喁」（中秋月寄子由）と詠む。

（48）臘月の祭祀。「殲」は尽きること。韓愈「芒碯大包内、生類恐民殲」（苦寒詩）。歳末を「殲」と詠むのは珍しい。押韻するための用字。

(49) 純な綿。王褒「夫荷旃被毳者、難与道純綿之麗密」(文選「聖主得賢臣頌」)。「魯薄」は魯酒薄の故事。劉克莊「純綿未覺十年暖、薄酒難禁二月寒」(江山道中)。

(50) 蘇軾「荒園有絡緯、虛織竟何成」(倦夜)。前句にある「純綿」からの連想、ここは滝の喩え。

(51) 静かで長閑な様子。『詩経・小戎』「厭厭良人、秩秩德音」。

(52) 使者として対応すること。『論語・子路』「誦詩三百、授之以政、不達。使於四方、不能專对」。ここは独りで蟋蟀の鳴き声に向かうことか。

(53) 盟約を締結する。『春秋左氏伝・僖公三年』「公子季友如齊位盟」。前句にある「專对」からの連想。「鶻」は比翼の鳥(爾雅)。韓愈「況逢旧親識、無不比鶻鶻」(送文暢師北遊)など。

91 唐^ハ交^ニ公^ニ遠^ニ信^ニ 唐は公遠に交はりて信あり 御

92 竺^ハ化^ニ仲^ニ尼^ニ兼^ニ 竺は仲尼を化して兼ね 洪

93 深^ハ院^ニ色^ハ彰^ハ杏^ニ 深院 色彰はるる杏 溪

94 苦^ハ霖^ニ実^ニ標^ニ枿^ニ 苦霖 実標⁽⁵⁵⁾つる枿 澗

95 雲^ハ予^カ同^ニ出^ニ自^ニ 雲は予が同出自 廣

96 物^ノ体^ニ忽^ニ然^ニ瞻^ニ 物の体 忽然として瞻る 竹

97 晨^ハ鉢^ニ能^ニ馴^ニ鳥^ニ 晨鉢 能く馴るる鳥 岳

98 日^ハ輪^ニ疾^ニ走^ニ蛱^ニ 日輪 疾く走る蛱 節

99 叡^ハ齡^ニ加^ニ十^ニノ 叡齡 十に加ふるノ 良

100 謹^ハ俾^ニレ宝^ニ香^ニ謙^ニ 謹みて宝香をして謙しからしむ 雲

(54) 羅公遠、唐玄宗の時の道士。ただしここで「交」と「信」との取り合わせは不詳。

(55) 『詩経・召南』「標有梅、其实七兮」。「標」は梅が熟して木から落ちる意。

(56) 僧の朝食を盛る器。陸游「僧分晨鉢笋、客共午甌茶」(春晚雜興六首、其一)。

(57) 「十」に「ノ」を加えると「千」になる。長寿をいう。(58) 香の美称。「拈香曰、大日本国山城州平安城、龍宝山太徳禪寺新住持、伝法沙門宗頤、謹爇宝香、端為祝延今上皇帝聖躬万歳万歳万万歳」(虎穴録)。

咸巖十五 慶長十九年八月二十九日

1 秋^ハ榜^ニ先^ニ從^ニ桂^ニ 秋榜 先に桂よりす 外

2 氷^ハ輪^ニ屢^ニ繞^ニ杉^ニ 氷輪 屢しば杉を繞る 重

3 声^ハ成^ニレ文^ニ促^ニ織^ニ 声 文を成すは促織 御

4 面^デ似^ル語^ハ来^ニ緘^ニ 面^{おもて}語るに似るは来⁽²⁾緘

廣

5 雁^ニ有^ニ等閑^ノ策^一 雁に等閑の策有り

峰

6 鳩^ハ其^レ遊^ノ説^ノ誦^ニ 鳩⁽³⁾は其れ 遊説の誦

召

7 泰^ト封^ト松^ノ錯^クレ^ル枉^ヲ 泰封 松は枉^{まが}れるを錯^おく

倫

8 交^ト趾^ト惹^ス生^シレ^ル讒^ヲ 交趾 惹⁽⁴⁾は讒を生ず

寿洪

9 若^シ載^ヘ車^ニ詩^ノ景^ヲ 若し車に載すは詩景

竹

10 非^ル携^ハ杖^ニ法^ノ巖^ヲ 杖を携ふるに非ざるは法巖

節

(1) 明月の喩え。蘇軾「夜半老僧呼客起、雲峰闕处湧氷輪」
(宿九仙山)。

(2) 「緘」は手紙をいい、緘書、緘札などの語もある。白居易「開緘見手札、一紙十三行」(初与元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然因此寄)。

(3) 鳥の名、その啼き声がよく詩に詠まれる。蘇軾「朝先啼鳩起、暮与寒蛩続」(次韻劉景文登介亭)。「誦」は低い声でぶつぶついう。韓愈「日来省我不肯去、論詩説賦相誦誦」

(酬司門盧四兄云夫院長望秋作)。「遊説」は前句の「策」からの連想。

(4) 馬援が薏苡によって死後に讒言を承けた故事。『後漢書・馬援列伝』「初、援在交趾、常餌薏苡実、用能輕身省欲、

以勝瘴氣。南方薏苡実大、援欲以為種、軍還、載之一車。
(中略) 及卒後、有上書讒之者、以為前所載還、皆明珠文犀」とある。

11 宝陀宜^シ現^スレ^ル趙^ニ 宝陀⁽⁵⁾ 趙を現するに宜し

澗

12 瀉^ト嶠^ノ直^ニ伝^フレ^ル巖^ヲ 瀉嶠⁽⁶⁾ 直に巖に伝ふ

緒

13 画^ノ餅^ヲ飢^ニ寧^ニ救^フ 画餅 飢寧ろ救はんや

重

14 筆^ノ鋒^ヲ勢^ハ已^ニ鑱^シ 筆鋒 勢ひは既に鑱⁽⁷⁾し

外

15 蒲^ノ揺^テ欺^ク漫^ニ理^ヲ 蒲揺れて漫理を欺く

廣

16 竹^ノ密^ニ隔^ツ塵^ノ凡^ヲ 竹密かにして塵凡を隔つ

御

17 仙^ノ戸^ノ同^ク棲^ム鶴 仙戸 同じく棲む鶴

召

18 妾^ノ閨^ヲ独^ニ看^ル 妾閨 独り看る 窺⁽⁸⁾

峰

19 里^ハ千^ハ親^シ 則^チ咫^ニ 里は千 親しきときは則ち咫

雲

20 年^ハ百^ハ瞬^{ナリ} 兮^ニ纔^ニ 年は百 瞬なり纔

倫

(5) 宝陀寺。蘇軾「靈峰山上宝陀寺、白髮東坡又到来」(題靈峰寺壁)。趙は趙州禪師か、ただし接点が不詳。

(6) 瀉山靈祐。「巖」は香巖智閑、瀉山の法嗣。

(7) 不規則な模様。『太平御覧』兵部七四・剣中に「陽日干将、而作亀文。陰曰莫邪、而作漫理」とある。ここは揺れる蒲のなす模様。

21 朝^ニ去^テ榮^ハ榮^ハ 朝に去りて榮を榮とするは槿

22 雪^ノ時^ハ老^レ老^レ楓^ハ 雪の時 老を老とするは楓

23 漢^ノ宮^ニ修^ス以^レ玉^ヲ 漢宮 修するに玉を以てす

24 湓^ノ浦^ニ近^ク沽^ス杉^ハ 湓浦 近くは杉を沽す

25 乘^ス興^ニ妓^ノ船^ノ伝^ハ 興に乗ず 妓船の伝

26 堪^{タリム}艸^ニ官^ノ醞^ノ咸^ハ 艸むに堪へたり 官醞[〓]の咸

27 手^ノ談^ハ琵琶^ハ善^シ 手談[〓] 琵琶は友として善し

28 形^ノ役^ハ銍^ハ夷^ハ芟^ハ 形[〓]の役 銍は夷らげ芟る

29 文^ハ統^ハ無^ク窮^ノ焰^ハ 文は無窮の焰を続^ク

30 扇^ハ除^ク太^ノ苦^ノ炎^ハ 扇は太苦の炎を除^ク

(8) 白居易「元和十年、予左遷九江郡司馬。明年秋、送客湓

浦口、聞船中夜彈琵琶者」(琵琶行、併序)。

(9) 官制の酒。宋王の禹偁が好んで用いるが、他の詩人には用例が少ない。黄庭堅には「醇道得蛤蜊復索舜泉舜泉已酌尽官醞」という詩題がある。「咸」は飲酒を好む阮咸か、不詳。

(10) 碁を対局すること。『世説新語・巧藝』「王中郎以囲碁為坐隱、支公以囲碁為手談」。

(11) 外形に拘束されて役されること。陶淵明「帰去来兮、田園將蕪胡不帰。既自以心為形役、奚惆悵而独悲」(帰去来辞)。「銍」は鎌。「夷芟」は鎌で切り取られること。欧阳脩「遺編最愛孫武説、往往曹杜遭夷芟」(聖俞会飲)。

31 翻^ス荷^ヲ香^ニ起^ル翡^ハ 荷を翻す 香起の翡

32 賦^{クハル}芋^ヲ食^フ嘖^ル獅^ハ 芋を賦[〓] 食らひ嘖る獅

33 総^{ニル}不^レ真^ハ巴^ノ字^ヲ 総に真ならざるは巴字[〓]

34 逆^ニ難^ハ張^リ楚^ノ帆^ハ 逆に張り難きは楚帆[〓]

35 戴^テ雲^ヲ漁^ノ笠^ヲ重^シ 雲を戴きて漁笠重し

36 結^テ霧^ヲ俊^ノ毫^ハ尖^{ナリ} 霧を結びて俊毫尖る

37 描^{クハ}幻^ヲ質^ヲ空^ノ紙^ハ 幻質を描くは空紙[〓]

38 極^{ムル} 妖^マ妍^ハ 妍^ハ 古^コ 鑑^{ケン} 妖妍を極むるは古鑑 御

39 疊^ス 吳^ウ 施^シ 美^ミ 笑^{カウ} 吳を疊^{まじわ}す 施が美笑 節

40 燕^イ 若^ニ 汝^ニ 垂^ニ 饒^ニ 若に燕して汝は垂饒^{（一六）} 召

(12) 『莊子・齊物論』「狙公賦茅曰朝三暮四、衆狙皆怒」。

(13) 巴峽、形が巴の字に似ている。巴峽に猿の鳴き声が漢詩に詠まれることから、前句から連想された。『新撰朗詠集』

「巴峽猿声催客淚、銅梁山翠入紅樓」(李嘉祐)。

(14) 楚地の船。杜甫「不夜楚帆落、避風湘渚間」(銅官渚守風)。

(15) 我が身。寒山「蔬食養微軀、布裘遮幻質」(詩三百三首、其一六一)。

(16) 涎を垂らすこと。蘇軾「吳兒膾縷薄欲飛、未去先說饒涎垂」(將之湖州戲贈莘老)。

41 山^ハ 講^{コウ} 遠^{エン} 交^{コウ} 好^{コウ} 山は遠交の好を講ず 峰

42 国^ハ 専^{セン} 通^{ツウ} 判^{パン} 監^{カン} 国は通判の監を専らにす 澗

43 宦^ハ 狐^コ 蹲^{ツン} 雉^シ 伏^フ 宦は狐蹲^(一八) 雉伏 雲

44 医^ハ 馬^バ 勃^{ハク} 稠^{チウ} 衙^ヤ 医は馬勃^(一九) 稠衙 御

45 諛^チ 念^ヘ 瑠^ル 璃^リ 皓^コ 諛ひては瑠璃皓を念ず 澗

46 転^メ 収^{コウ} 咽^{エン} 哆^ダ 漸^{セン} 転じては咽哆の漸を収む 竹

47 茂^ハ 騰^{テン} 春^{シュン} 草^{ソウ} 謝^{シャ} 茂は騰る 春草の謝 雲

48 名^ハ 馥^フ 砌^セ 蘭^{ラン} 汜^ハ 名は馥し 砌蘭の汜^(二〇) 節

49 瀑^{ハク} 凍^{ドウ} 白^{ハク} 龍^{リウ} 蟄^{セツ} 瀑凍えて白龍蟄す 御

50 泥^ニ 融^{リウ} 玄^{ゲン} 舄^{シツ} 喃^{ナン} 泥融して玄舄喃す 澗

(17) 遠く離れた人との交友。『管子・法禁』「遠交以踰群、仮爵以臨朝者、聖王之禁也」。山住にはほとんど訪問客がないことから珍重される。

(18) 身を隠すこと。張鷟『朝野僉載』「猖獗小子、狡猾庸人、浅学浮詞、輕才薄德、狐蹲貴介、雉伏權門」(卷四)。

(19) 菌類の一種。韓愈「牛溲、馬勃、敗鼓之皮、俱收併蓄、待用無遺者、醫師之良也」(古文真宝「進学解」)。「稠」は貝の一種、「衙」の使用例は未見。

(20) 「瑠璃皓」という熟語の用例は未見。仏語か、一句の意味も後考を待つ。

(21) 根多に同じ。ここでは仏典のこと。

(22) 謝靈運「今復河曲遊、鳴霞泛蘭汜」(擬魏太子鄴中集詩八首、其七)。

51 困^テ 知^ル 恒^{コウ} 兀^コ 兀^コ 困りて知るは恒に兀兀^(二二) 重

52 覺^カ密^ミ乱^レシ^シ 竹 覺密^{カミ}乱^レて^シシ^シ

53 霞^ハ盜^ミ武^ム昌^シ柳^{リウ} 澗 霞^ハは武^ム昌^シの柳^{リウ}を盜^ミむ

54 炉^ニ煨^{ハス}懶^ノ散^{イセ} 雲 炉^ニには懶^ノ散^{イセ}の薪^ノを煨^スす

55 鷗^ハ冲^ル軒^ノ翥^ノ翼^ノ 御 鷗^ハは冲^ルる 軒^ノ翥^ノの翼^ノ

56 鷺^ハ羨^ム月^{ツキ}題^ト 召 鷺^ハは羨^ムむ 月^{ツキ}題^トの題^ト

57 媒^{ナカ}雨^{アメ}稱^ス妻^メ電^{デン} 竹 雨^{アメ}を媒^{ナカ}ちとす 妻^メと稱^スする電^{デン}

58 賓^フ涼^{リョウ}呼^フ伯^{ハク}風^{フウ} 節 涼^{リョウ}を賓^フく 伯^{ハク}と呼^フぶ風^{フウ}

59 何^ソ微^ミ曹^{ソウ}鄒^{ソウ}谷^コ 御 何^ソぞ微^ミなる 曹^{ソウ}は鄒^{ソウ}の谷^コ

60 得^レ訣^ツ鄂^{アハ}潭^{タン}巖^{イハ} 澗 訣^ツを得^ル 鄂^{アハ}潭^{タン}の巖^{イハ}

(23) 不動にして勤苦するさま。韓愈「焚膏油以繼晷、恒兀兀以窮年」(古文真宝「進学解」)。また無知なさまなど。

(24) 「シ」は刷毛目、また毛飾り、草が茂る様子など。ここは髪が乱れるさま。

(25) 陶侃が政務に勤しみ、移された官柳を摘発した故事。『晋書・陶侃列伝』「侃性纖密好問、頗類趙広漢。嘗課諸宮種柳。都尉夏施盜官柳植之於己門。侃後見、駐車問曰、此是武昌西門前柳、何因盜来此種。施惶怖謝罪」(卷三十六)。

蘇軾「春江淥漲蒲萄醅、武昌官柳知誰栽」(武昌西山並序)。

(26) 懶残和尚が芋を煨す故事。支第四56に既出。

(27) 馬の額の飾り。『莊子・馬蹄』「夫加之以衡扼、齊之以月題」。蘇軾「花前白酒傾雲液、戸外青驄響月題」(次韻劉貢父省上喜雨、其二)。

(28) 「鄒」は『詩経・国風』の第十三、檜とも。第十四は曹。『春秋左氏伝・襄公二十九年』「自鄒以下無譏焉」とあり、杜預注「言季子聞此二国歌、不復議論之、以其微也」。「谷」は山谷こと黄庭堅。黄庭堅は「我詩如曹鄒、浅陋不成邦」(子瞻詩句妙一世乃云效庭堅体蓋退之戲效孟郊樊宗师之比以文滑稽耳恐後生不解故次韻道之)と詠む。

(29) 「鄂潭」は鄂州と潭州か、不詳。「訣」は道教修練の秘訣。道教の經典に「黄庭経」また「黄庭訣」と呼ばれる書物があり、漢詩での用例が多い。前句に取り上げられた黄庭堅からの連想か。また「国巖」は呂巖、字洞賓。唐末の人、修練して仙人になったという。その詩に「肘伝丹篆千年術、口誦黄庭両卷経」(絶句、其十三)とある。

61 智^チ不^レ氷^{リニセ}相^チ劍^ツ 峰 智^チは相^チを氷^{リニセ}りにせざる劍^ツ

62 招^レ令^{ハムル}坐^ル我^ワ温^ン 御 招^レは我^ワを坐^ルせしむる温^ン

63 顔^{ケン}酩^メ花^ハ醉^ツ露^ニ 節 顔^{ケン}酩^メくして花^ハは露^ニに酔^ツふ

64 生^シ淡^{タン}筧^シ通^ツ淺^{セン} 雲 生^シ淡^{タン}くして筧^シは淺^{セン}りを通^ツす

65 鳥^モ亦有巢氏 鳥も亦 有巢氏⁽³⁾ 御

66 鯉^レ其^レ於^テ洛^ニ醢^ス 鯉は其れ 洛に於いて醢す 竹

67 積陰閑^{イタツラニ} 灌^ニ甕^ヲ 積陰⁽³⁵⁾ 灌甕を閑にす 召

68 曠野設^ツ罝^ヲ 曠野⁽³⁶⁾ 罝を設く 雲

69 誰^シ某^レ誤^ル登^ニ篠 誰^{それがし}某ぞ 登を誤る篠 節

70 師承^レ酬^フ乳^ニ機 師承 乳に酬ふ機⁽³⁷⁾ 潤

(30) 「智劍」は智恵の劍。『臨濟録』「若人修道道不行、万般邪境競頭生。智劍出来無一物、明頭未頭暗頭明」(示衆)。

「不氷相」の意味は不詳。

(31) 「招」は招提、すなわち寺院のことか。「盪^{はん}」は酒杯の意。

「令我坐」の意味は不詳。

(32) 生まれながらの性質。『朱子語類』の卷九十五「程子之書一」に、孟子の「生之謂性」の説明として水を算にかけて濾過する話がある。

(33) 住居を發明した伝説上の聖人。ここは「鳥も亦」とあるのは鳥が巢くうこと。

(34) 洛水の鯉の脰が美味とされる。『洛陽伽藍記』に「洛水上南北兩岸門巷修整、(中略)伊洛之魚、多于此賣。士民須臾、皆詣取之。魚味甚美。京師語曰、洛鯉伊魴、貴於牛羊」と記す。

(35) 曇りが続くこと。劉禹錫「積陰春暗度、將霽霧先昏」(武陵書懷五十韻)。蘇軾「清風卷地收殘暑、素月流天掃積陰」(答仲屯田次韻)。「灌甕」は灌漑用の甕。李白「抱甕灌秋蔬、心閑遊天雲」(贈張公洲革処士)。

(36) 「罝」は蔽い、「弋射所蔽者也」(說文解字)。狩り場の情景か。

(37) 「乳」は法乳、「機」は慧星。

71 宗^{トス}堯^レ知^ニ識^ヲ舜 堯を宗とす 知識の舜 御

72 夢^ム郭^ヲ侍^ニ郎^ヲ淹 郭を夢みる 侍郎の淹⁽³⁸⁾ 雲

73 薔^ハ簇^{カルスル}寄^ニ吾^ニ錦 薔は簇がる 吾に寄する錦 竹

74 葉^ハ横^ヲ送^ル客^ヲ船^ハ 葉は横たふ 客を送る船^ハ 節

75 蛙^ハ音^ハ喉^ハ是^レ鄭^ハ 蛙⁽³⁹⁾音 喉はれ鄭 重

76 狗^ハ吠^ハ賊^ハ終^ニ坊^ハ 狗吠 賊終に坊 御

77 負^テ暖^ヲ裘^ヲ虚^ク擲^ツ 暖⁽⁴⁰⁾を負ひて裘は虚しく擲つ 雲

78 困^テ城^ヲ枚^ハ幾^ニ嗽^ヲ 城を困みて枚は幾たびにか嗽^{かく}む 重

79 射^テ潮^ヲ蘆^ヲ箭^ハ急^{ナリ} 潮を射て蘆箭⁽⁴²⁾急なり 潤

80 徹^メ曉^ニ 楮^ニ衾^ス 灑^{マシ} 曉に徹して楮衾灑し

峰

(38) 江淹が郭僕を夢みた故事。塩第十四54に既出。

(39) 蛙の鳴き声、俗物の喧噪。蘇軾「鳴蛙與鼓吹、等是俗物喧」(用旧韻送魯元翰知洛州)。「蛙音」は、蛙の鳴き声を音楽とする故事。『南史・孔圭列伝』「圭風韻清疎、好文詠、飲酒七八斗。(中略)門庭之内、草萊不剪、中有蛙鳴。或問之曰、欲為陳蕃乎。圭笑答曰、我以此當兩部鼓吹、何必效蕃。王晏嘗鳴鼓吹候之、聞群蛙鳴、曰此殊聒人耳。圭曰、我聽鼓吹、殆不及此。晏甚有慚色」。「鄭」は鄭国、その音楽や歌謡は、卑俗なものとして儒家に排斥された。『論語・衛靈公』「放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆」。

(40) 負日。『列子・楊朱篇』「宋国有田夫、常以緇廣塵、僅以過冬。暨春東作、自曝於日。不知天下之有広厦、陳室、綿纊、狐貉。顧其妻曰、負日之暄、人莫知者」。「裘虚擲」とは裘を無意味なものとして棄てる。宋人が「狐貉」を知らないことをいうと同時に、前句に使用される鶏鳴狗盜の故事に登場する裘と関連する。

(41) 李愬が雪の夜に蔡州を奇襲した故事。敵に気づかれないように、兵士には口に枚を銜えさせた。本書に用例が多い。

(42) 蘆の芽が鋭く尖る様子の喩え。黄庭堅「飛雪洒蘆如銀箭、前雁驚飛後回眄」(題晃以道雪雁図)。

81 霜^メ厚^ク 碎^ツ 鴛^ニ瓦^ヲ 霜厚くして鴛瓦を砕く

節

82 月^メ清^ク 琢^ツ 蚌^ノ 月清くして蚌を琢く

竹

83 膠^ニ盟^リ 還^テ去^ル 復^ル 膠盟 還り去りて復る

潤

84 碑^ニ誌^ヲ 読^ミ来^ル 摺^ル 碑誌 読み来りて摺る

雲

85 醜^ニ石^ヲ 苔^ニ埋^メ 没^ス 醜石 苔は埋没

峰

86 靈^ニ壇^ヲ 繫^ス 至^ニ誠^ヲ 靈壇 繫は至誠

御

87 晚^ニ成^ル 才^ニ大^ニ器^ヲ 晚成 大器を才とす

竹

88 藏^ニ主^ヲ 閱^ス 全^ニ函^ヲ 藏主 全函を閱す

澗

89 般^ニ若^ク 附^ス 鶯^ニ舌^ヲ 般若 鶯舌に附す

節

90 胡^ニ揮^ス 打^ツ 塵^ニ鬚^ヲ 胡揮 塵鬚を打す

召

(43) 鴛鴦を模った瓦。白居易「鴛鴦瓦、冷霜華重、旧枕故衾、誰与共」(長恨歌) など。

(44) 「蚌・」という熟語の使用例は未見。「・」は玉に似て、それに次ぐ石をいい、ここでは押韻するための用字。蚌に育まれた美玉を琢くという、月を真珠と喩えるか。

(45) まことである。『尚書・虞書』「至誠感神、矧茲有苗」。

(46) 「閱」は字義が不詳。句意を推測するに「閱」(けみす)の誤写と考えられる。塩第十四77句に既出。

(47) みだりに振るい払うこと。『欠伸稿』「手中扨子弄胡揮、劈破白雲為黒衣」(自賛竹中采女正請)。「鬚」は髪が垂れ

る様。

91 鐘瘖僧 樂宰^{レム}

鐘瘖して僧は宰^{レム}を楽しむ

重

92 冠整武 召黯^イ

冠整えて武は黯^イを召す

節

93 可^{ナリ}レ口書中 栗

口に可なり 書中の栗

澗

94 励^ス慈痛処 鍼

慈を励ます 痛処の鍼

雲

95 有^レ空難療病

有^レ空は療し難き病

御

96 濃^レ淡^レ恸^レ輦^ニ 𪔐^一

濃淡は輦に恸^ニふ𪔐^一

竹

97 足^レ恃^ニ奇逢^ニ 約

恃^ニむに足れり 奇逢^ニの約

峰

98 無^レ倫奢利 𪔐^ニ

倫無きは奢利の𪔐^ニ

御

99 綴^レ班禁^ニ 洊^ニ驚^ニ

班を綴るは洊^ニを禁ずる驚^ニ

澗

100 挟^ム乙振威 𪔐^ニ

乙を挟むは威を振るふ𪔐^ニ

召

(48) 「宰」はこゝでは家畜などを殺すこと。殺生。「瘖」は声が出なくなること。鐘が瘖すとは、寺院で鐘を撞き勤行する者が居なくなる意味。

(49) 「黯」は武帝の臣の汲黯。初めの官位を恥じて断つた汲黯に対して、武帝はより高い職を以て任じた。『史記・汲黯列伝』「召以為主爵都尉、列於九卿」。

(50) 仏語。有と空は対義語。森羅万象の歴然として存在するを有といい、その実体の空虚なるを空という。

(51) 「𪔐」は顔が長いさま、こゝは東施のこと。輦みに效うという故事。「濃淡」は蘇軾「若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」（飲湖上初晴後雨二首、其二）がよく知られる。

(52) 「奇逢」は不意な出合い、ただし熟語として中国漢詩での用例は未見。五山僧の詩作では『欠伸稿』「今日奇逢任自然、知音更有旧因縁」（𪔐庵主、別後及九年。不意再会西山下。賦野偈一章、以求一笑云）などが見える。

(53) 「奢利」は舍利弗、釈迦の弟子の中でも随一の智慧を持つ。「無倫」は匹敵する者が無いほど優れること。欧陽脩「瓊花芍薬世無倫、偶不題詩便怨人」（答許発運見寄）。「𪔐」は欬に同じ。智慧が多いこと。

(54) 「班」は官階の序列。その象徴として官服に驚が綴られる。「洊」は汚すこと。「洊を禁ずる」は驚の潔さをいうか。

(55) 虎が威勢を備えていることをいう。蘇軾「得如虎挟乙、失若龜藏六」（寄傲軒）。

鳳城聯句集 卷之下 終

〔付記〕

『鳳城聯句集』に対する訓読と簡略な注釈は本稿を以て終了となる。数年にわたる断続的な作業であったが、全体を振り返った時、故事典抛の利用や表現と連想方法について、本書を特徴付ける傾向がうかがえる。一方、なお不明のまま残っている用語や表現が多く、筆者の浅陋による見当外れの解説も少なくない。追って新稿を起し、併せて

まとめたと思う。

本稿は科学研究費「後陽成院聯句会及び五山文学と貴族漢文学の交流——『鳳城聯句集』を中心に——」（課題番号 15K16688）による成果の一部である。

（よう　　こんほう・武蔵野大学准教授）